教育実践報告

社会人基礎力を活用した国際短期研修の実践と評価

酒　井　宏　平
城西大学　現代政策学部

要　旨

本報告は、城西大学現代政策学部がタイ王国チュラロンコン大学芸術学部と共同で実施した国際短期研修について、その実践内容と成果を社会人基礎力を指標に評価したものである。事後アンケートの結果、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の全領域で統計的に有意な向上が示された。自由記述からは、異文化環境での生活体験とグループワークが、学生の主体性や実行力、課題発見力、計画力、ストレスコントロール力などを育む要因として大きく寄与したことがうかがえる。一方で、研修内容の違いによる効果の差異や、事前・事後評価のタイミングと方法に関する検討などが今後の課題として指摘される。本研修をはじめとする海外派遣プログラムの継続的な発展が、城西大学におけるグローバル人材育成をさらに推進することが期待される。

キーワード：タイ王国、短期研修、文化、観光、社会人基礎力

1. はじめに

現代社会においては、グローバル化が急速に進展し、多文化共生が重要な課題として広く認識されるようになっている。このような背景から、異文化理解や国際協力のスキルを備えたグローバル人材を育成する必要性が高まっている。特に、国際的な視野をさらに広げ、異文化間におけるコミュニケーション能力や協働力を身につけることは、学生にとって将来的なキャリア形成のみならず、社会貢献においても不可欠な要素であるといえる。

こうしたニーズに応えるために、多くの教育機関が国際短期研修プログラムを実施しており、城西大学においてもグローバル人材の育成を目指した取り組みが積極的に展開されている。たとえば、女性人材育成センターや国際教育センターなど、大学全体としては、対立や紛争を乗り越え、協創力によって課題解決を目指すリーダーを養成するための女性リーダー研修（城西大学, 2024a）や、ハンガリーのブダペスト商科大学との共同研修プログラム（城西大学, 2023）などが挙げられる。さらに各学部に目を向けると、経済学部では、日系アメリカ人が活躍しているハワイのビジネス社会や歴史、文化を学ぶハワイでのビジネス研修プログラム（城西大学, 2024b）や、経済的・文化的に日本との関係が深い韓国のビジネス社会や歴史、文化を学ぶプログラム（城西大学, 2024c）、さらには中国の上海市と蘇州市を中心とする華東地域において海外

ビジネス研修（城西大学，2024d）が実施されている。これらのプログラムは、海外での異文化体験を通じて学生の成長を促し、グローバル社会で活躍するための基礎的な力を養成することを大きな目的の一つとしている。

このような状況のもと、ポストコロナを経て2024年から城西大学現代政策学部において新たに始動したのが、タイ王国チュラロンコン大学芸術学部と共同で実施する「タイ国際文化研修」である。その詳細は次節にて述べるが、タイ王国の首都バンコクを実地フィールドとし、文化と観光の両立について考察する短期研修となっている。本報告では、タイ国際文化研修の実践内容を紹介するとともに、その評価を行うことを目的とする。評価の尺度としては、研修参加者がグローバル人材へと成長した度合いを「社会人基礎力」をもとに捉え、検討を加えていく。

社会人基礎力を指標として海外研修や国際研修を評価する先行研究としては、以下のようなものが挙げられる。たとえば、金ら（2015）は、韓国文化交流を具体例として社会人育成プログラムの効果把握に取り組んでおり、この研究では事前研修・研修・事後研修を含めて約半年にわたるプログラムを通して、社会人基礎力に基づく20の質問項目をプログラム開始前後に尋ねることで評価している。その結果、20項目中17項目において平均数値が上昇しており、プログラムが社会人基礎力の向上に寄与することを示唆している。また、仁科ら（2012）はマレーシアの海外協定校との連携研修プログラムを対象に、社会人基礎力と語学力の両面から評価を行い、異文化環境で過ごす一定の時間が、潜在的に保有していた主体性などの社会人基礎力を顕在化させ、帰国後の生活態度にも変化をもたらしていると指摘している。さらに、高橋ら（2022）は、客室乗務員に特化した海外エアライン研修を題材に、社会人基礎力とホスピタリティ、キャリア発達の観点から評価を実施し、結果として客室乗務員に必要な諸要素が研修を通じて成長することを明らかにしている。

いずれの研究においても、社会人基礎力を用いた研修効果の測定が、国際短期研修プログラムにおける成果評価の一般的な手法として活用されている。本報告においても、社会人基礎力を評価指標に据え、国際短期研修プログラムを通じて得られた学生の成長を明らかにし、その教育的意義を検証することを最終的な目的とする。

2. 社会人基礎力

社会人基礎力とは、経済産業省（2006年提唱）が示す、職場や地域社会など、多様な人々と協働しながら仕事を行っていくために欠かすことのできない基礎的な力であると定義されている（経済産業省，n.d.）。この概念は大きく分けて「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つから構成され、それぞれを支える12の能力要素が設定されている。専門的なスキルや学術的な基礎力を効果的に活かすためには、あらゆる状況下において自らの能力を最大限に発揮できる社会人基礎力の修得が非常に重要となっている。グローバル化が進行する今日の社会では、職場や地域で異なる文化的背景を持つ人々と連携する機会が増大することが予想されるた

め、社会人基礎力を強化することは将来にわたる課題として引き続き重要視される。

具体的に言及すると、社会人基礎力を形作る３つの領域のうち、「前に踏み出す力」は、一歩前へ踏み出し、たとえ失敗を経験しても諦めずに粘り強く挑戦を続ける力を指している。この「前に踏み出す力」には、物事に積極的に取り組む主体性（主体性）、周囲の人々に働きかけて巻き込む行動力（働きかけ力）、そして目的をしっかり設定し、それに向けて着実に行動へ移す実行力（実行力）の３つの要素が含まれている。次に、「考え抜く力」は、常に疑問を持ち、物事を深く考え抜く姿勢を意味し、現状を多角的に分析して目的や課題を明確にする力（課題発見力）、課題解決に向けた具体的なプロセスを整理し、必要な準備を進める力（計画力）、そして新たな価値やアイデアを生み出す力（創造力）の３要素で構成されている。最後に、「チームで働く力」は、多様な人々とともに目標へ向かって協力しながら成果を生み出していく力として位置付けられる。この力には、自分の考えや意見をわかりやすく他者に伝える力（発信力）、相手の意見に丁寧に耳を傾けて理解する力（傾聴力）、意見の違いや相手の立場を尊重しながら柔軟に対応する力（柔軟性）、自分を取り巻く状況や周囲との関係性を的確に把握する力（情況把握力）、社会全体のルールや人との約束をしっかり守る力（規律性）、そして生じるストレスの原因を適切に見極め、それをコントロールしながらパフォーマンスを発揮する力（ストレスコントロール力）という６つの要素が含まれている。

1. タイ国際文化研修

本報告では、2024 年３月と同年９月に、城西大学現代政策学部がタイ王国国立チュラロンコン大学芸術学部と共同で実施したタイ国際文化研修を対象に評価を行う。

タイ国際文化研修は、観光と文化を両立させる持続可能な政策について学び考え、提案・発信する政策人材の育成を目的とする研修である。アフターコロナの観光においても、観光公害の問題が再燃している中、観光都市として栄えるタイ王国・バンコクをフィールドに観光と文化にまつわる問題・政策を座学、視察、演習の形式で学ぶことを目的としている。本研修の効果として、まずタイ王国の歴史・文化・社会・経済に関する基礎知識や理解度を深めることで、異文化理解や自己成長を促すこと、次に現地大学の学生との交流を通して、国際的なネットワークやグローバルな協働力を築くこと、最後に、持続可能な観光や責任ある観光に関する理論や事例に触れることで、新たな観光政策や戦略の構想力や創造力を高めることが期待されている。

2024 年３月の研修は「ARTS Chula Spring Program in Thai Language and Culture」として、３月２日（土）から３月 15 日（金）の期間に実施され、現代政策学部の学生８名が参加した。2024 年９月の研修は「ARTS Chula Summer Program in Thai Language and Culture」として９月２日（月）から９月 17 日（火）の期間に開催され、現代政策学部の学生 11 名が参加した。いずれの研修も、タイ王国国立チュラロンコン大学芸術学部を拠点に実施した。

渡航前に、合計７回にわたる事前研修を実施した。研修の内容としては、自己紹介やアイスブ

レイク、手作りマップ作成に必要なイラストを描くスキル育成講座、タイについての基本講義、持っていくものリストの作成などである。

渡航後の研修の構成としては、前半から中盤は文化や観光に関する基礎講義と、事例の視察である。終盤にはグループワークを実施し、最終日にグループワークの成果を、両大学の教員や現地学生の前で発表した。2024 年 3 月の研修のグループワークでは、研修を通じて学んだこと、

表 1.　2024 年 9 月のタイ国際文化研修の主な内容

日程	内容
9 月 2 日	到着、オリエンテーション
9 月 3 日	開会式、チュラロンコン大学生との交流、キャンパスツアー、サイアムエリアの視察
9 月 4 日	タイ語講座① 講義（文化保護と観光） タイトマーケット視察
9 月 5 日	タイ語講座② タイの伝統舞踊体験
9 月 6 日	タイ語講座③ タイボクシング体験
9 月 7 日	チャトゥチャック・ウィークエンド・マーケット視察
9 月 8 日	バンコク郊外にある中華系、ヒンドゥー系、タイ仏教の寺院視察
9 月 9 日	グループワーク
9 月 10 日	ワットアルン、ワットポー、アイコンサイアム視察
9 月 11 日	タイ料理調理体験、タイの花飾り作り
9 月 12 日	講義（タイの歴史と日本との関係）
9 月 13 日	グループワーク
9 月 14 日	ジムトンプソンの家視察、グループワーク
9 月 15 日	グループワーク
9 月 16 日	グループワーク
9 月 17 日	グループ発表、閉会式
9 月 18 日	帰国

写真 1　タイボクシング体験

写真 2　タイ料理調理体験

成長したこと、今後にどのように研修経験を活かすかについての発表資料の作成に取り組んだ。一方で、2024 年 9 月のグループワークでは、観光都市バンコクの魅力を発信する手描きマップの制作と、そのマップ目的や概要についての発表資料の作成に取り組んだ。表 1 は、2024 年 9

写真 3　チュラロンコン大学生と共にタイ語を学ぶ様子

写真 4　タイの伝統舞踊体験

写真 5　トゥクトゥク

写真 6　視察

写真 7　グループワーク

写真 8　グループ発表

写真 9　グループ成果物（手作りマップ）

写真 10　閉会式

表 2. 質問内容

	要素	質問文
前に踏み出す力	主体性	物事に自分から進んで取り組んでいる。
	働きかけ力	まわりの人に声をかけて動かしていける。
	実行力	目的を設定し，確実に実行・行動している。
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し，目的や課題を明らかにする
	計画力	物事を計画的に進めて，準備していく。
	創造力	いつも何か新しいものを生み出すことが得意
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく相手に伝える
	傾聴力	人の意見や話を丁寧に聴く
	柔軟性	意見の違う人にも柔軟に対応できる
	情況把握力	自分とまわりの人や物事の関係性を理解する
	規律性	社会のルールや人との約束を守る
	ストレスコントロール力	ストレスにうまく対応できる
自由記述	研修の感想	この研修での文化体験や交流を通じた感想をエピソードとともに記述してください。
	成長やスキル	この研修を通じた成長や身につけたスキルをエピソードともに教えてください。

月実施分の研修内容である。

帰国後には、城西大学地域連携センター主催の地域連携発表会のパネル展示に参加し、城西大学内外の方へ、本研修の活動内容や成果について発信した（城西大学，2024e）。また、城西大学のホームページでも、本研修の活動の様子を発信した（城西大学，2024f）。

参加学生には、金ら（2015）の質問項目を活用し、表 2 に示した社会人基礎力の 13 要素を問う質問を尋ねた。さらに、および研修の感想や研修を通じて感じた成長について自由記述する形式の質問に回答を依頼した。これらの質問は、日本帰国後に参加者に配布し、事前および事後の状況について自己評価を依頼した。参加学生 19 名のうち 17 名から回答を回収した。

2. 研修参加による社会人基礎力の向上

本研究の分析においては、研修参加者の自己評価を数値化するために、「とても当てはまる」を 5 点、「やや当てはまる」を 4 点、「どちらでもない」を 3 点、「あまり当てはまらない」を 2 点、「全く当てはまらない」を 1 点とする 5 段階の評価基準を設定したうえで、対応サンプルに対する Wilcoxon の符号付順位検定を実施する方法によって、事前評価と事後評価の差異を比較した。その結果、表 3 に示されるように、評価対象となった 13 項目のうち 8 項目において、統計的に有意な差をもって事後評価の数値が事前評価よりも高く示されることが明らかとなった。さらに、社会人基礎力を構成する 3 つの主要な領域である「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、

表 3. タイ国際文化研修における事前・事後自己評価の変化

		事前平均	事前標準偏差	事後平均	事後標準偏差	平均の差（有意確率）
前に踏み出す力		3.39216	0.94444	3.80392	0.70534	**
	主体性	3.82353	1.04236	4.00000	0.76696	
	働きかけ力	3.05882	1.05555	3.58824	0.84428	**
	実行力	3.29412	1.07182	3.82353	0.78480	*
考え抜く力		2.94118	0.83420	3.62745	0.78284	**
	課題発見力	3.17647	1.04236	3.76471	0.87645	*
	計画力	2.88235	1.07825	3.70588	0.89210	**
	創造力	2.76471	1.05882	3.41176	1.08784	*
チームで働く力		3.80392	0.56370	4.19608	0.50240	**
	発信力	3.17647	0.85648	3.58824	0.77146	*
	傾聴力	4.00000	0.84017	4.29412	0.57032	
	柔軟性	3.70588	0.95577	4.23529	0.64438	
	情況把握力	4.35294	0.47788	4.41176	0.59988	**
	規律性	4.58824	0.49215	4.64706	0.58824	**
	ストレスコントロール力	3.00000	1.02899	4.00000	0.76696	**

N=17，*:p<0.05，**p:<0.01

「チームで働く力」のそれぞれについて、個別の項目ごとの得点を合計し、その平均値を算出して事前と事後の評価を比較したところ、3つの領域すべてにおいて有意に事後評価が高い傾向が確認された。すなわち、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」のいずれの領域においても、研修を経た後の数値が統計的に見ても有意に上昇しており、研修に参加したことがこれらの社会人基礎力の向上につながったと推察される。

はじめに、「前に踏み出す力」を構成する3つの要素に着目すると、働きかけ力と実行力については、事前評価と比較した際に統計的に有意な差が認められ、事後評価が高まっていることが明確に示された。一方で、主体性に関しては、有意差が見られなかったものの、事前評価の段階ですでに3.82353という比較的高い得点を獲得していたことが、その要因の一つとして考えられる。とはいえ、主体性の平均値は3.82353から4.00000へと微増（0.17647ポイント）しており、絶対値としてはわずかではあるものの上昇傾向が認められた。

さらに、「前に踏み出す力」全体の平均点を検証してみると、3.39216から3.80392へと0.41176ポイントも向上していることが確認され、その差は有意なものであった。このことから、研修を経て全体的に「前に踏み出す力」が伸長したと推察される。

また、自由記述においては、「仲間たちと協力して何かを成し遂げる力や、自分から積極的に行動を起こす力を身につけることができた」という回答があり、特に研修内でのグループワーク

を通じて成果物を作り上げ、最終的に発表を遂行する過程で「実行力」が養われたことを示唆する記述が散見された。さらに、「飲食店での注文や商品を購入するときに、自ずと英語を使う機会が増えたため、英語を積極的に活用してみようという意欲が高まった」「さまざまなことに挑戦する心構えが身についたように感じる。そもそもタイ研修に参加するという行為自体、これまでの自分では考えられない挑戦であり、非常に良い経験となった」といった感想も寄せられており、「積極的」「挑戦」といったキーワードにより、「前に踏み出す力」が具体的に高まっている様子がうかがえる。

このように、タイという日本とは大きく異なる文化的背景をもつ場所に身を置く国際研修だからこそ、非日常的な体験の機会が多く、普段の生活では得られにくい挑戦意識や積極性を喚起する要因となったと考えられる。結果的に、学生たちは研修を通じて従来よりも大胆に行動し、自らの主体性や働きかけ力、そして実行力を磨くことができたと推測される。

続いて、「考え抜く力」を形成する３つの要素に着目すると、課題発見力・計画力・創造力のいずれの要素についても、事前評価と事後評価との間に統計的に有意な差が認められたことが明らかとなった。さらに、「考え抜く力」という領域全体の平均点を比較してみると、事前評価 2.94118 から事後評価 3.62745 へと 0.68627 ポイント上昇しており、その上昇幅が有意なものであると示された。この結果から、本研修を通じて「考え抜く力」が総合的に強化されたと推察できる。

また、自由記述の内容を検討してみると、「グループ課題の進め方や方向性、テーマ設定が定まらず、当初予定よりも進捗が遅れてしまったが、それを取り戻すために計画を修正し、臨機応変に対応する力が身についたと感じた」という回答が見られた。このエピソードからは、グループ内で進捗が遅れた状況を“課題発見力”によって把握し、さらに締め切りに間に合わせるために計画を見直す“計画力”を発揮する過程を経験したことがうかがえる。こうした具体的な事例は、まさに研修中の協働作業を通じて、学生たちが状況に応じた柔軟な思考や実行プロセスの調整を実践したことを示唆している。

加えて、「手作りマップ作成を行う際、おすすめの食べ物ランキングのコーナーなど、ユニークな要素を取り入れることで、従来とは一味違った地図に仕上げられた」という感想も共有されており、この取り組みを通じて“創造力”を発揮する機会が得られたことが確認できた。実際に、グループでのディスカッションやアイデア出しによって、多面的な工夫が凝らされた独創的な地図を作成する工程は、創造的な思考力を伸ばす場として機能していたと考えられる。

総じて見ると、「考え抜く力」は主としてグループワークにおける試行錯誤や最終成果発表の準備、さらには手作りマップの作成といった協働作業のプロセスにおいて、学生たちが積極的に頭を働かせ、課題の抽出から計画の立案、そして新しいアイデアの創出までを実践的に学んだ結果、高められた傾向があると考察できる。こうした経験は、学習の場を超えて将来的な活動においても役立つ思考スキルとして定着することが期待される。

最後に、「チームで働く力」について着目すると、「発信力」、「情況把握力」、「規律性」、「スト

レスコントロール力」において、事前評価と比較した際に事後評価が統計的に有意な形で向上していることが示された。さらに、「チームで働く力」全体の平均値も 3.80392 から 4.19608 と 0.39216 ポイント上昇し、有意な差が認められたことから、研修参加によって学生たちの「チームで働く力」が高まったと考えられる。

まず、「発信力」に関する自由記述としては、「タイ語は挨拶レベルしかわからなかったけれども、自分で調べたり、人の会話を聴いたりする過程で、英語を使ってコミュニケーションを図る際の抵抗が薄れた」「全く異なる国籍の人々とも、身振り手振りや簡単な英単語などを活用して意思疎通ができるようになった」という回答が得られている。こうしたエピソードからは、限られた語学スキルの中でも、自ら積極的に伝える姿勢を身につけた事例が読み取れる。また、「発信力」と「傾聴力」の両面に言及した感想としては、「グループワークで自分の考えを口にし、他のメンバーと意見を交わしながら、想像以上に完成度の高い地図を作ることができた」「役割分担や方向性がうまく定まらず苦労したが、自分の意見をしっかり言い、同時に仲間のアイデアを受け止めることで、無事に乗り越えることができた」といった声が寄せられている。これらの記述は、研修内のグループワークを通じて互いに情報を伝え合い、相互理解を深めていくプロセスで「発信力」と「傾聴力」を同時に高めた具体的な証左といえよう。

さらに、「情況把握力」に関する自由記述には、「タイ研修を経験するなかで、一人ひとりが周囲の状況を注意深く観察し、他人を気づかう行動が自然に行えるようになったことで、物事を広い視野で考える力が養われた」といった内容があった。特に、団体で活動する機会が多かったため、集団全体の体調や動きにまで意識を向ける姿勢が求められ、その結果、自分以外のメンバーのコンディションや進捗状況を把握しようとする働きかけが活性化したと考えられる。引率教員である筆者の体験談としても、著者自身が細心の注意を払っていても、当事者以外の学生からの報告によって初めて特定の学生の体調不良に気づく場面がたびたびあったという。こうしたエピソードからは、学生たちが研修全体を一緒に運営・サポートする主体的な姿勢をもって、周りに目を配り、気づかいのできる集団に成長したことがうかがえる。

ストレスコントロール力については、「タイ語を全く話せない状態で文化や生活面に対してはさほど抵抗を感じなかったものの、やはり海外での日常やタイ語への不安は大きかった。しかし、チュラロンコン大学で日々タイ語を学習するうちに、徐々に聞き取れる単語が増え、3 週間という短期間でもある程度暮らしていく術を実感できた」という回答があった。これにより、未知の環境や食習慣、文化的な差異に直面した際のストレスを自分なりに処理し、乗り越えられたという手応えを得ていることがわかる。加えて、グループワークでのテーマ選定や締め切りへのプレッシャー、進捗が遅れた際の焦燥感など、学生たちが抱えるストレス要因は多岐にわたっていたと推定される。しかしながら、最終発表までを無事に乗り切るためには、各自がストレスを適切にコントロールし、チーム全体としての成果を最大化する必要があった。その結果、一人ひとりが自分の置かれた状況を捉えながら、前向きに対処していく力が養われたといえる。

このように、言語面の障壁や文化的相違、限られた時間内でプロジェクトを進めねばならない

ストレスといった要素が複合的に作用する国際研修の現場において、学生たちは協働作業を通じて「チームで働く力」を総合的に高めていったと考えられる。彼らが得た実践的なコミュニケーション力や情況把握、そしてストレス管理のスキルは、今後の学業や社会生活においても多大な恩恵をもたらすことが期待される。

3. 結論にかえて

グローバル人材の育成が社会的に喫緊の課題として掲げられる中、城西大学においても、前節までに紹介したさまざまな海外派遣プログラムが積極的に展開されている。本報告で主題として取り上げるタイ国際文化研修も、そうした取り組みの一環である。2024年3月に初めて実施された第1回目の研修では、現代政策学部の学生だけを対象とし、合計8名の参加者を得て実施した。次いで、2024年9月に行われた第2回目の研修では、独立行政法人日本学生支援機構の2024年度海外留学支援制度（協定派遣）学生交流創成タイプ（タイプA）プログラムに新たに採択された結果、経済学部、経営学部、現代政策学部という3つの学部の学生まで対象を広げ、最終的に合計11名の学生が参加する形となった。さらに、来年度も同様に9月の開催が予定されており、前年を上回る数の学生の参加が見込まれることから、城西大学におけるグローバル人材育成を牽引するプログラムとして、さらなる発展が期待されるところである。本報告では、2024年3月に実施された研修および2024年9月に実施された研修の2事例を対象として、社会人基礎力に関する評価を行った。その際、参加学生に対して事後にアンケート調査を実施し、研修前と研修後の自己評価を比較する形で分析を進める方法を採用した。また、量的データの解析だけでなく、自由記述欄に寄せられた意見や感想もあわせて取り上げることで、より深みのある考察を行うことを試みた。その結果、社会人基礎力は研修に参加する前と後とで明確に向上していることが統計的にも示された。加えて、自由記述の内容からは、タイという異文化の現地環境で生活しながら学習を進める経験そのものと、他者との協働を通じて成果物を仕上げるグループワークの双方が、学生の社会人基礎力を高める一因となっている可能性が示唆された。特に、言語的・文化的に異なる環境に身を置くこと自体が刺激となり、研修中のさまざまな課題や活動への主体的・積極的な取り組みを促す好循環が生じていたと考えられる。こうした国際的な学びの機会を継続的に発展させ、より多くの学生に参加を促していくことが、城西大学全体としてのグローバル人材育成推進に大きく寄与すると期待される。

一方で、本報告における課題としては、大きく3点が挙げられる。まず第1の課題として、2024年3月に実施された研修と2024年9月に実施された研修のプログラム内容に、わずかながら差異が存在するという点が指摘できる。とりわけ、グループワークのテーマや作業内容において相違が認められる点は重要である。具体的には、2024年3月の研修では、研修を通じて学んだ内容や身につけた成長点、さらには今後その研修経験をどのように活かしていくかといった項目について発表資料を作成したのに対し、2024年9月の研修では、観光都市バンコクの多様な

魅力を伝える手描きマップの制作に加え、そのマップの目的や概要に関するプレゼンテーション用資料を作成している。グループワークが社会人基礎力の向上に貢献していることは本報告の結果からも示唆されるが、取り扱うテーマや作業内容に違いがあるため、それぞれの研修がもたらす影響にも差異が生じる可能性が高い。本報告では両者を区別した詳細な比較検討までは踏み込んでおらず、今後の研究では、それぞれのグループワークの特性や、そこから導かれる成果の違いについても分析する必要があると考えられる。

次に、第 2 の課題として挙げられるのは、調査方法の設計に関する問題である。たとえば、豊田（2019）の研究では、研修開始前に社会人基礎力に関する事前評価を実施し、研修終了後に事後評価を行うという形式を採用している。金ら（2015）の研究でも同様の手法が取られており、こうした方法によって、研修による変化をより正確に捉えることが可能となる。一方で、本報告では帰国後に事前評価と事後評価の両方をまとめて実施しているため、参加者が事前の自分を振り返る際に、結果的に過小評価または過大評価をしてしまうバイアスが生じている可能性が否定できない。したがって、先行研究と同様に、研修前と研修直後の 2 回にわたって評価を行う手法を導入することで、より客観性と信頼性の高いデータを得られるだろう。

最後に、第 3 の課題として指摘されるのは、研修を通じて社会人基礎力が向上したことはわかったものの、その向上が一体どのプログラムによってもたらされたのかを量的に把握しきれていない点である。自由記述の回答からは、グループワークや海外という特殊な環境が社会人基礎力を育む上で寄与している可能性が示唆されるが、統計的なデータとしては研修全体の効果しか捉えられていない。将来的に研修内容をより充実させるためには、各プログラムの細目と社会人基礎力の 13 の要素との関連を精密に把握する研究手法の導入が必要となる。プログラムごとにどの能力要素が強く発揮されるのか、あるいは参加者にどのような学びや変化をもたらすのかを詳細に検証することで、研修設計の改善や最適化に役立つ知見が得られると期待される。

謝辞

本研修実施にあたって、現代政策学部教員の皆様、現代政策学部事務室の方々、国際教育センターの方々、カウンターパートのチュラロンコン大学芸術学部の皆様に多大の支援をいただきました。2024 年 3 月と 2024 年 9 月のタイ国際文化研修に参加してくださった合計 19 名の学生の皆様がいなければ、本研修を実施することはできませんでした。本当にありがとうございました。

参考文献

城西大学.（2024a）.【女性人材育成センター】「女性リーダー育成奨励生」募集のお知らせ｜大学からのお知らせ｜城西大学. Retrieved December 25, 2024, from https://www.josai.ac.jp/news/2024

1011_1/

城西大学．（2023）．【国際教育センター】2023 年度　ハンガリー研修を実施しました｜大学からのお知らせ｜城西大学．Retrieved December 25，2024，from https://www.josai.ac.jp/news/hungary_program/

城西大学．（2024b）．ハワイ ビジネス研修プログラム｜経済学部｜城西大学．Retrieved December 25，2024，from https://www.josai.ac.jp/economics/international/program/hawaii/

城西大学．（2024c）．韓国ビジネス研修プログラム｜経済学部｜城西大学．Retrieved December 25，2024，from https://www.josai.ac.jp/economics/international/program/korea/

城西大学．（2024d）．【経済学部】経済学部で初めての中国ビジネス研修が実施されました｜大学からのお知らせ｜城西大学．Retrieved December 25，2024，from https://www.josai.ac.jp/news/20240911/

金栄俊，& 俵石正雄．（2015）．社会人基礎力を育成する海外研修．太成学院大学紀要，17，115–124．https://doi.org/10.20689/taiseikiyou.17.0_115

仁科浩美，安原薫，& 廣瀬文彦．（2012）．実践英語力及び社会人基礎力の向上を目指した派遣型サマープログラム．工学教育，60（4），4_97-4_102．https://doi.org/10.4307/jsee.60.4_97

髙橋修一郎，& 石村友二郎．（2022）．海外エアライン研修による観光ホスピタリティ教育の可能性．観光ホスピタリティ教育，15，2–21．https://doi.org/10.24535/jsthe.15.0_2

経済産業省．（n.d.）．社会人基礎力（METI/ 経済産業省）．Retrieved December 25，2024，from https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html

豊田祐輔．（2019）．PBL 型短期間国際ワークショップによる社会人基礎力成長モデルに関する研究．地域情報研究，8，98–109．https://doi.org/10.34382/00005934

城西大学．（2024e）．【地域連携センター】2024 地域連携活動発表会を開催しました｜大学からのお知らせ｜城西大学．Retrieved December 25，2024，from https://www.josai.ac.jp/news/j-clic20241103/

城西大学．（2024f）．【現代政策学部】タイ文化と観光を学ぶ国際研修、無事修了！　城西大学の学生が成果発表に挑戦｜大学からのお知らせ｜城西大学．Retrieved December 25，2024，from https://www.josai.ac.jp/news/20240924/

A Study on the Practice and Evaluation of an International Short-Term Training Program Utilizing Fundamental Competencies for Working Persons

Kouhei SAKAI

Abstract

This report examines the international short-term training program jointly implemented by the Faculty of Contemporary Policy Studies at Josai University and the Faculty of Arts at Chulalongkorn University in Thailand. The program's design and outcomes were assessed using the framework of "Fundamental Competencies for Working People." Post-training survey results indicated statistically significant improvements across all three competency domains—namely, the ability to "take the initiative," "think things through," and "work in teams."

Analysis of open-ended responses suggests that living in a cross-cultural environment and engaging in group work significantly fostered students' autonomy, execution skills, problem-identification abilities, planning capabilities, and stress-control strategies.

Keywords：Thailand, short-term training, culture, tourism, fundamental competencies for working persons